

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子(巻)一冊一冊発行
江戸時代(1600-1868)

3月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その七十八



掌中の大望を手に初明り
神丘の光ついばむ初すずめ
虎の威は借りず持たざる年男
今昔の判官びいき親子草
春眠の夢の私語ささめのとばっちり
済し崩す里の憂ひや雪解川

胡麻播りも家訓のひとつ地虫出づ
リラ冷えの街は重たき扉を開く
倭はおぼる余震のつづく大都会

吟行・伏見稲荷

東風吹いて小さき「お塚」に小さき神
稲荷山こだま返しに春が来る
春ここに目鼻のゆるむ狐絵馬
ふところへ寒晴の朱をお稲荷さん
一步二歩祈りの山へ梅探る

—
近詠

誰彼塚

鶏鳴のこだま返しや初山河
初弓の逸れたることも神意なる
大旦野風呂岬の金泥波
とびしまの闇むらさきに太郎月
一湾の誰たそ彼がれ塚づかや初明り

和田 照海



—
近詠

寒林

松本 鷹根



寒林の寡黙に耐へて川を出る
直情に徹す早春嵯峨竹路
野地蔵は蔭の微笑に雪残す
遠嶺更け架橋灯の冴返る
大寒の河の蛇行を眩しめり

塩貝 朱千



オリオン

亜麻いろの冬薔薇に風亜麻色に
オリオンや無言の涙に別れ来て
洋梨のくびれを抱く着ぶくれて
枯れ切って鴉遊ばす一樹かな
過ぎゆく日みないとほしき春待月

英華採集

冬帽子かむり己れといふ荷物

大津 鈴木 順子

夏帽子を被る女性はキラキラと輝く太陽のように活発なイメージを持たせるが、冬帽子は逆に寒さを防ぎ自分を防御するようなマイナスイメージを植え付ける。掲句は、冬帽子を介在させて正しく自分を隠すように働かせている。人は歳を重ねて生きていくと周りの者へ要らぬ気遣いを見せるもので、それが「お荷物」という言葉になって表れたのである。季語の「冬帽子」が、作者の内面を上手く引き出している。

銀河濃し地球の裏を見る電波

福山 瀬尾 ちとみ

人類が電波を利用するようになったのは約一二〇年前からと言われているが、今では利用する電子機器の殆どに電波が使われ、GPS・気象レーダーなど様々な用途に活用されている。我々は、この電波を生活に役立て人間の幸福につながるようにしなければならぬ。しかし、反面いつの世にも悪事に利用する輩がいることも事実。その悪なるものが地球の裏側である。地球を取り囲む美しい銀河系の星群は、この事実をどう見ているのか？作者の憂いがここにある。

からからと風の尻尾と枯葉競る

赤穂 久保 みどり

落葉樹の宿命、自然の摂理として木々から離れてしまった葉はやがて鮮やかに紅葉した色を失い枯葉となっていく。そこには枯木、裸木となった蕭条たる冬の景が広がっていくが、掲句は枯葉が風と戯れている世界を描いており、親猫の尻尾にじやれる子猫のようなメルヘンチックな仕立ては、中七の「風の尻尾」の措辞から窺える。そして、五七五のK音の心地良いリズムが一句を楽しめるものと昇華させている。

啓 蟄 沼田巴字

啓蟄や晩学心を昂らす
天を突く赤子の拳蔵生ふ
出し惜しみなき人生や初牡丹
花杏恋の思ひ出遠くして
賑やかに師とや弟子とや野風呂の忌

ひとつ灯に 北川孝子

ひとつ灯に猫うら返る夜のみかん
かみ合はぬ一日の暮しそぞろ寒む
遠き日のコスモス街道冬ざれて
立志とはひとり暮しに夜の更けて
われひとりさすらふ夜の毛糸玉

福寿草 植村蘇星

歳長けて縁の重し福寿草
初詣帽子持ち上げ遠会積
初たまごまさかの双子めでたけれ
寒の入り老いの挑戦土づくり
ふくよかな福耳揃ふ初句会

水澄む 直江裕子

リビングが露の沙漠になっている
水澄んで既に終わったひとといる
救いがたいおでんの玉子老いもする
マスクして見事あやつに謀られる
蔦紅葉食器を水に浸けたまま

柚子絞る 高木晶子

喝采を貰へぬ水雨人眠る
敷紅葉八十才の見る景色
何故夜が来るかと問へば蕪蒸
退屈で昨日も今日も柚子絞る
雪起しあの山動いてはならぬ

室の花 奥田筆子

幽閉に解放感あり室の花
イヴの灯や砂漠の花も紅きそひ
旅券なき綿虫風の管絃に
冬木の芽太初の青き生命線
顔見世や端役の手管酢つばくて

花 柊 伊藤希眸

都心の空「ひゆうむ」と走る虎落笛
幸不幸外目に見えず花柊
雑音や師走に浴びる風呂の湯気
年送る鼓の遠音励みかな
見とどけし命かずかず初雪降る

白梅紅梅 井上菜摘子

さくさくと日月はすぎ梅匂ふ
女子高生容れてポップな梅の園
梅林みんな迷子になりゆく
白梅のなかの紅梅いたましき
白梅紅梅ばんねんのとちゆうなり

神麓集

春なれや

村田あを衣

おぼろ夜の賤やさしき夢観音
掌中の種は夢なり花種蒔く
春なれや大時計鳴る旧駅舎
花おぼろ望郷さそふ遠汽笛
晩春のオウムは言葉つむぎをり

金木犀

山中志津子

金木犀拵げて地球壊れゆく
山茶花の散る散る未完の私小説
北山の風も漬けこむ酸茎樽
山眠り電子頭脳も夢を見る
北風の夜は小面が泣きに来る

桃の日

井尻妙子

桃の日を食み出して居るマスク連
まだ独りてふ自負雛の夜の遊び
赤鬼は子のヒーローよ春立てり
買ひ初めのあれこれ迷ふちゃわん坂
弱虫のかたまつてゐる霜の朝

風の隣り

鷺山珀眉

夕去りの宇治夕凍みの橋たもと
きぬずれの風の通ひ路返り花
凧や行方不明のキーワード
枯れのなか風の隣りに坐りけり
はつふゆといふくちびるのやはらかさ

寒波くる

亀井福恵

寒波くるわが現身を楯とせむ
鷹渡る容赦なく過ぐ持時間
地球の自転年々速し懐手
控室一寒灯を分け合ひぬ
首塚は転生の途次しろばんば

恋紅葉

菊池和子

初雪や昨夜のひとこと過去形に
宇治橋や激流を呑む恋紅葉
秋明菊ふたりの距離は素直なる
遠き日の乾きし音や木の実落つ
街中の時が螺子巻く十二月

微熱

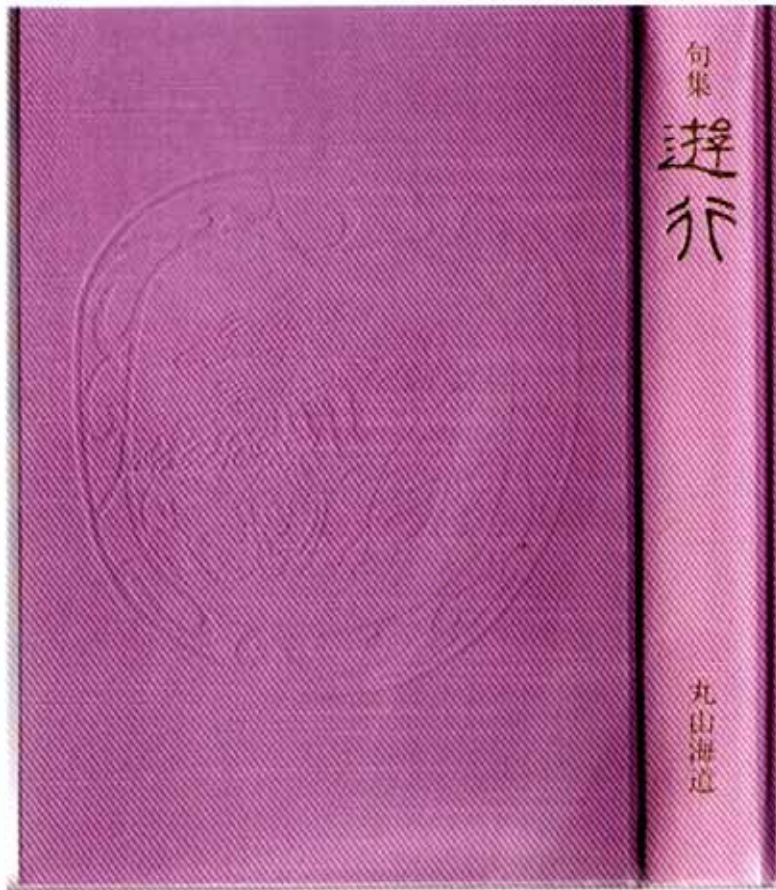
西村白杼

裸木の両手の梢にある微熱
大晦日主婦の五体のゆれ通し
山茶花や番茶も出花鬼笑ふ
愛なんていつも嘘つきポインセチア
心臓は五臓のひとつ冬苺

宙の黙

安田優歌

鯉はねて秋水やぶる宙そらの黙
湯豆腐の湯気の中より妣ははのこ糸
懐郷の鐘の音遠し赤とんぼ
こころ佳き美女医の葉冬ぬくし
布団干し夜も同居の日を抱く



丸山海道 第十句集 『遊行』



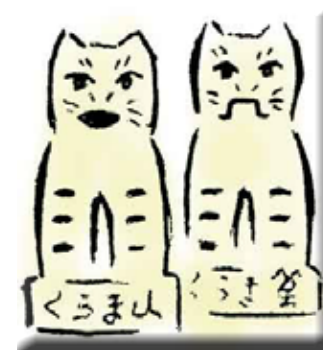
京鹿子 平成5年3月号
『遊行』表紙モデル

地の裏話 本郷 公子

凧や地の裏話あらはにす
どの窓も灯火親しき日曜日
夕千鳥汀に沿うて母を恋ふ
木枯やひとひらの葉のゆき所
冬暁に染むる鳳凰天翔む

初霜 石原孝人

初霜や小さく洗ふ朝の顔
もの言はぬ野良の一日や寒夕焼
理髪店鏡としゃべる小春かな
風の音箒にからめ掃く落葉
眠る山森にしみ入る斧餅





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

木枯しや思考回路の崩れさう

岡山 佐藤 千恵

十二月いづこに失せし耳飾り

思ひこみ先行くばかり大晦日
方寸の日だまりにゐて冬に入る

甲羅酒一病かこつ者ばかり

銀河濃し地球の裏を見る電波

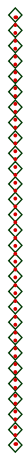
福山 瀬尾ちとみ

ホットレモン恋にときめく待ち時間

闇に溶く木犀の香や光君

冬風や浜にめりこむ大碓

灯を点し柿食ふ夜のひとりぼち
豆腐屋の湯気ほつほつと寒すずめ



冬帽子かむり己れといふ荷物

大津 鈴木 順子

人の世の乾き湿りも年の暮

未知の地の播磨の里を熊訪ひぬ

冬たんぽぽ元号四つ生くる姑

赤穂 久保みどり

初雪のタワー^{みやこ}京の柔らかし

アヲチ 伊吹 之博

パリスタの切れある動き冬のカフェ

ゆらぎつつ赤たもちつつ吾亦紅
水仙の一輪の白日を弾く

市川 小島 正士

年の暮禿びし箒を新品に

日記買ふ明日へと光る街明かり

毛糸帽目の美しきがん患者

参道の露店気になる七五三

松戸 岡山 敦子

夕風に落葉は何処へ行くのやら

笛鳴きに庭木の小さき揺れ走る

寒空へ悠悠鳶の舞続け

秋深しスマホで歩く世界地図

寄鍋に家族全員二人かな

ポインセチア町の花屋の華やげり

冬立つや防災放送試験中

雪富士のあの稜線を滑りたき

習志野 上野 紫泉

判断に間違ひもあり十二月八日

関ヶ原つきぬけ伊吹山冬に入る

書き込みの空白埋まる古暦

からだまだ立ち止まりゐる十二月

極月や頁めくれば明日がある

将軍塚紅葉あかりの揺れやまず

運勢は結実運や暦買ふ

文明利器危ふきに備ふ冬構

船橋 元橋 孝之

なみ揺れて朝の目覚めや師走来る

半歩引き下段の構へ花八つ手

湯豆腐や笑ひも湯気のなかに浮き

神妙な顔顔や西の市

極月や磨きあげたる自家用車

晩成や花柎の棘何処

朝ドラに戦後の暮し年惜しむ

夜半の月皓皓街を明るくす

丹羽 武正

曾孫の胎動の突く良夜かな

未造成宅地に可憐野紺菊

スマホで買ふおにぎり二つ文化の日

時雨るるや足の向くまま図書館へ

新蕎麦やサーマルカメラと睨めっこ

冬ざくら香まつすぐにまつすぐに

しみじみと句友を偲ぶ夕月夜